石棒と丸石神信仰

小さな旅

甲斐の秋は美しい。

盆地の木々が赤く染まり、周囲の山々に初冠雪が見られるころになると、空は青く澄み、空気は乾燥し、きりりと身が引きしまってきます。八ヶ岳の山麓では、脱穀した稲藁を乾燥し保存するために、積み上げた藁塚（ワラニョウ）が、晩秋の光を浴びて田に濃い影を落としています。

田んぼや畑の間に点在する屋敷の庭では、屋根より高く枝を伸ばした鈴なりの柿の実が、澄み切った青空と美しいコントラストを描いています。

晩秋の一日、そんな美しいのどかな風景に囲まれた金生遺跡と、発掘された石器などを収蔵した北杜市考古資料館に足を伸ばしました。

私の家から金生遺跡までは、高速道路を使えば40分ほどです。いま新しい旅の形としてマイクロツーリズムが注目されています。新型コロナウイルスの蔓延で、航空機や新幹線など長距離の移動が難しくなりました。

自宅から1時間程度の馴染みの場所を訪れ、身近な風景を楽しみ、自分の住む地域を再発見すること、それがマイクロツーリズムです。わずらわしい予約や大きなスーツケースは必要ありません。必要なのは自分が暮らす地域を愛おしむ気持ちとちょっとした好奇心だけです。

金生遺跡は縄文後期から晩期の遺跡です。住居址の近くに祭祀の場とみられる石組みの大きな遺構が見つかったため、縄文の精神文化を知る上で極めて貴重な遺跡として、昭和58年に国の史跡に指定されました。

金生遺跡　配石遺構と復元住居・後ろは八ヶ岳

また平成30年には諏訪湖周辺から八ヶ岳南麓、甲府盆地一帯が「星降る中部高地の縄文世界」という素敵なネーミングで日本遺産に認定されましたが、金生遺跡はその重要な構成資産のひとつになっています。

「星降る中部高地」のネーミングは黒曜石から来ています。黒曜石はガラス質の火山岩ですが、割れ口が鋭く加工しやすいため、矢じりやナイフをはじめとする多彩な石器づくりの材料として縄文人には必要不可欠でした。黒曜石は天から降ってきた星のかけらと思われていたのです。

金生遺跡の名前の由来ですが、日本国語大辞典によれば金生は「性崇拝の一種で、男根に似た自然木や自然石を神体として信仰する金精神の通称」とあります。

考古学上の遺跡はおおむねその場所の小字名がつけられることが多いのですが、古くからこの辺の畑から男根の形をした石がたびたび掘り出されていたので、地元の人たちはこの場所を金生と呼ぶようになったのでしょう。

遺跡への行き方を簡単に説明しておきます。車の場合は中央高速道路の長坂ICからインター大泉通りを北上して十分ほどです。JRを利用するなら中央本線の長坂駅で下車し、タクシーで二十分ほどです。北杜市考古資料館までは市民循環バスもあり、ＪＡ大泉支店前

で下車して徒歩5分ほどです。

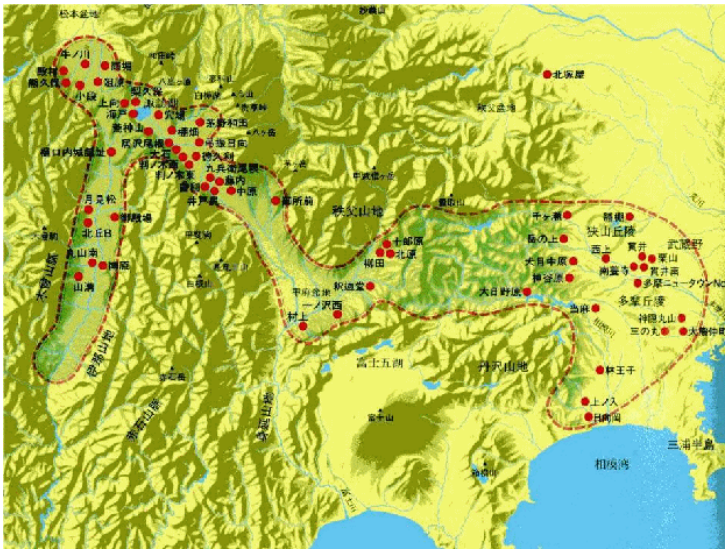
金生遺跡

金生遺跡は北に位置する八ヶ岳からなだらかに傾斜する尾根の上に位置しています。標高はおよそ七百七十～七百八十メートルです。遺跡の西にある浅い川には、きれいな水が流れていました。現在の所在地は北杜市になっていますが平成の町村合併までは、この辺は大泉村でした。八ヶ岳の豊かな伏流水が泉となって沸き出しているのでこの村名が付いたのです。

この川が縄文の人々にとってもおそらく重要な水場だったのでしょう。遺跡の周囲は刈入れが終わった田んぼが広がっていますが、ここに縄文の人たちが生活していた時代にはカシやナラやクリなどの広葉樹の森が広がっていたに違いありません。

八ヶ岳の裾野の高台に位置するだけに甲府盆地を囲む山々が一望の下に眺められます。北は八ヶ岳、南は富士山、東は金峰山、そして西は南アルプスの山並みが青空に屹立している様は絶景としか言いようがありません。縄文人だって、住居を構えるときには見晴らしの良い場所を好んだに違いありません。

今から5千年前の縄文中期、甲府盆地を中心に三日月眉のように広がる地域に、同じような雰囲気を持つ土器、土偶を造り、風俗習慣が似通った人々が住んでいました。考古学者が「富士眉月弧文化圏」と呼ぶ諏訪湖辺りから甲府盆地を通り南関東までの一帯です。



富士眉月孤文化圏　赤い丸印は縄文中期の遺跡

この地域は華麗な装飾を伴った土器を持つ豊かな文化が縄文中期に隆盛を迎えました。

その証拠は日本の他地域に比べ圧倒的に密度の濃い発掘遺跡数です。縄文時代中期には、この地域は日本の中心といっても過言では

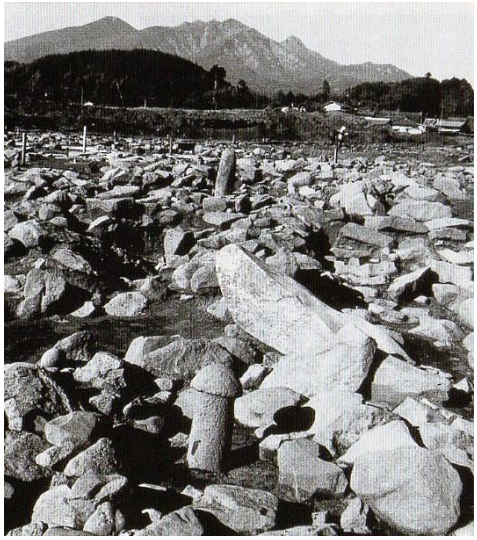
ありませんでした。

ところが隆盛を極めたこの地域の縄文中期の文化は、後期、晩期に入ると衰退し、遺跡数も激減してしまいます。縄文中期にピークに達した人口は後期には三分の一以下に激減します。

原因は縄文後期の四千年前から三千年前にかけて訪れた気候の寒冷化です。イノシシやシカの狩猟、木の実や山菜の採集など森の恵みに依存していた縄文の生活は、寒冷化によってその基盤を失ってしまいました。金生遺跡が位置する旧大泉村の遺跡数をみると、縄文時代六十一に対し、弥生時代五、古墳時代一と遺跡数は激減します。

大きな配石遺構と石棺墓

この衰退は気候が寒冷化した縄文後期から始まっていたと考えられていましたから、縄文後期の遺跡から祭祀の場所と見られる大きな配石遺構を伴った住居址が発見されたことは大きな驚きでした。出土した遺物から、人々の生活ぶりは、寒冷化によって食糧確保に汲々としていたとは考えられないほど豊かなものだったのです。



発掘中の写真

土製耳飾りやヒスイ製のペンダントなどの装身具が大量に出土しましたし、祭祀の道具に使われたと推定される怪奇な容貌の中空土偶も出土しました。しかし、なんといっても圧巻なのが、驚くほど多くの石を円形や方形に並べた配石遺構です。

一見、乱雑に石を集めただけに見えるようですが、中央に石垣状に石を組み、その南北に石棺墓を埋め、さらにその墓の上に円形や方形に石を敷き並べています。

死者を葬るのは宗教が生まれる前からヒトが行ってきた文化です。

ヒスイ製の装身具

イラクのシャニダール洞窟で発見された六万年前と推定される人骨の周囲の土には、八種類の花粉や花弁が含まれていたそうです。チンパンジーがいかにヒトに近くても、死んだ肉親や仲間の遺体に献花したという話は聞きません。

死者を葬るやり方を見れば、その時代の人々の世界観、価値観を知る手掛かりとなります。埋葬の歴史はヒトの歴史とともに古いといいますが、死者の魂や来世を考えるといった抽象的な思考がなければ、このような行為は発生しないでしょう。

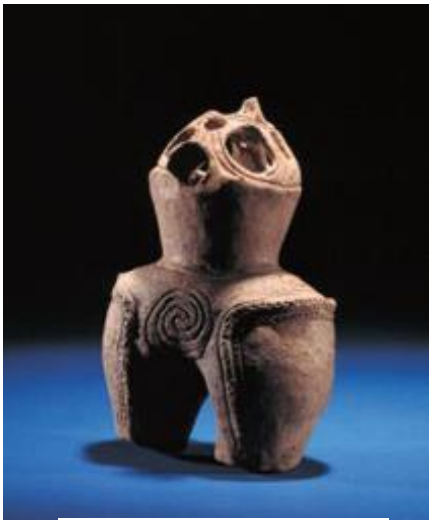
イノチはどこからくるのか、なぜ死はやってくるのか、死んだものはどこへ行くのか、現代人と同じように縄文人にとってもそれは深い謎だったはずです。親しいものの死に直面した時、ヒトは悲しみ、怒り、恐怖、無力感、疑問などの感情が交差し何かをせずにはいられません。それに対してヒトが考え出した一つの結論が「魂・たましい」という考え方です。

死者の肉体はモノとなってしまいますが、魂はそこから抜け出し、あの世を通って再びこの世に再生する。そう考えたからこそ、埋葬や葬送の儀礼が生まれたのでしょう。

北杜市考古資料館

遺跡の近くの北杜市考古資料館に発掘された遺物が展示されているので訪ねてみました。まず目を引いたのが奇怪な表情を持つ中空土偶。胴体内部は容器のように空洞になっています。

神奈川県足柄上郡大井町の中屋敷で発見された同じような土偶の体内には、赤ん坊の骨が入っていたといいます。この土偶の中からは骨は見つかっていませんが、胴体につけられた渦巻の文様は、この女神の子宮と、そこに至るための道を表わしているように見えます。幼くして死んだ赤ん坊が、再



中空土偶・金生遺跡出土

びこの世に再生してくるようにという切なる願いが込められているのでしょう。

資料館には配石遺構を再現したジオラマ展示もありました。この展示によって配石遺構を見てゆきましょう。遺構の大きさは南北約十五メートル、東西約六十メートルに及ぶ大規模なものです。石組に使われている石の中には八ケ岳山麓には存在しない花崗岩の巨石もあり、四キロも離れた釜無川から、相当な労力を投下して運びこまれています。標高差が二百メートルもありますので、当時としては大変な作業だったでしょう。

北側（写真上側）にある方形石組遺構の下には石棺墓が見つかりました。別の場所で火葬した人骨が、その人物を復元するように置かれていたといいます。

配石遺構　右下の円形配石の中心に立っているのが石棒

南側（写真下側）には円形の石

円形配石と石棒の復元展示

組がありますが、この下にも石棺墓が埋められていました。円形の石組を築いたのは、円形を女性器と見なしたのだろうと研究者たちは考えています。

この円形の石組みを貫くように立てられた石棒に注目してください。この石棒が男性器を象徴していることはいうまでもないでしょう。

また8号土抗と呼ばれた穴からは、一三八個体分のイノシシの下あごの骨が出土したことも注目されます。イノシシの多くは生後八カ月ぐらいの幼獣だったことから飼育し、間引きして食用にしていたことも十分考えられます。

一度にこれだけ多くのイノシシの骨が、しかも下顎骨のみが屠られたとすれば、単に食べた後の骨を捨てたというより、骨を使った何らかの呪術、祈りがおこなわれていたことが想像できます。

金生遺跡史跡公園。奥は復元された縄文壁立住居

私が連想したのは毎年四月十五日に行われる長野県の諏訪大社上社の「御頭祭」です。この祭りの時、シカの頭七十五頭をはじめイノシシの首やキジなど鳥獣魚類が神に特別な食事として神にささげられるのです。

近世まで血の滴るような本物のシカの首を並べていたといわれますが、さすがに最近では剥製を使っています。人間に恵みをもたらしてくれる鳥獣魚類に感謝する意味でこの生贄の儀式が続いてきたのでしょう。ルーツをさかのぼれば縄文時代に行きつくかもしれません。

アイヌの祭り・イオマンテも熊送りの祭りとして知られています。熊送りは、熊を人間の世界に土産を持って現れたマラブト（客人）と考え、土産に感謝しその魂を天に送り返す祭りです。無事に客人を天に送り返せば、客人は再び土

産を持ってこの地に帰ってくる。

イオマンテの祭りは、生命再生の祭りなのです。動物の種類は違っていても、金生遺跡で同じような祭りが繰り広げられていたと考えることは決して飛躍ではないと思います。

諏訪神社上社御頭祭りで神に捧げられるシカの頭

いずれにしても大規模な石組の祈りの場を造り、作成に手間がかかる装身具を身につけ、大量の動物を屠る祭りを行っていたとすれば、「寒冷化により衰退の道をたどり始めた中部山岳地帯における縄文後期文化」という従来の考古学的視点の見直しを迫られます。

金生遺跡は平成３年に史跡公園に整備され、出土した遺跡は恒久的に保存するために埋め戻されました。写真にある配石遺構は、盛り土をした上に、違う場所から持ってきた石で再現したものです。

この遺跡から眺める冬至の落日は、甲斐駒ヶ岳の山頂に落ちるといいます。縄文の人達は、冬至の日にこの配石広場に集まり、甲斐駒ケ岳に落ちる真っ赤な太陽を拝みながら、再生と豊穣への祈りをささげたのではないでしょうか。

沈み行く太陽は死に行く太陽です。その中でも冬至の太陽は衰弱の極に達した太陽であり、復活を願わずにはいられなかったのでしょう。

冬至の日に、再びこの地を訪れ、

はるか縄文の時代の人々の暮らしに思いをはせてみたいと思います。

石棒

金生遺跡でまず私が注目したのは、円形の配石遺構の中心に立てられていた石棒です。石棒は縄文中期以降の遺物ですが、世界各地にもこのような男根信仰は広く認められます。

形状は手のひらに握れるほどの小さいものから、二メートルを超す大型のものまであります。また長細い単純な棒のような形から、勃起を表現した反り返ったものや亀頭を明確に表現したものもあります。亀頭部分がベンガラで赤く塗られたもの、亀頭に目鼻口耳が付けられ、擬人化されたものなどもあります。

北杜市考古資料館所蔵

石棒はどのように使われていたのでしょうか。その出土状況から推測してみましょう。縄文晩期の遺跡である金生遺跡では、円形の配石の中心に石棒が立てられていました。このような例は、東北地方から中部山岳地帯にかけていくつか知られています。

住居の中で使用したと思われるケースもあります。山梨県立考古博物館に縄文時代の住居が復元展示されていますが、石棒はその住居の中の石組み炉の一角に立てかけられるように置かれていました。住居の奥に祭壇のように大切に置かれていたケースや、石棒と埋甕が住居の入口付近に対になって出土するケースもあります。埋甕は女性器を象徴していると見られることから、妊娠・出産を祈願したものでしょう。

また、わが生地、笛吹市一宮町の釈迦堂遺跡博物館では、土抗の

釈迦堂遺跡博物館所蔵

佐久の大石棒　223㎝もある

中から出土した石棒が展示されていますが、死者とともに埋葬されたと考えられています。

圧巻は長野県佐久市の田んぼの畦道にある長さ二・二三メートルの大石棒です。縄文中期のものと考えられていますが、そうすると四千五百年もこの地にそそり立ち続けていることになります。

縄文中期には個人の住居や墓の中で発見される石棒が、金生遺跡のように野外に持ち出され、配石の中に置かれるようになるということは、石棒への祈りが個人単位、家族単位から集団単位へ移り変わっていったことを意味するのではないでしょうか。

長細い石から石棒の形を磨きだすには、鉄製の道具や機械がなかった時代では大変な労力と根気を必要としたに違いありません。

石鏃や深鉢型土器は人間にとって実用的な道具です。それに比べ石棒は実用には役立ちません。それにもかかわらず腹の足しにならない石棒を精魂込めて造り続けた背景には、男根と、さらにいえば精液に対する深い信仰があったと考えられます。

石棒が女性器を貫くように円形の配石の中心に置かれたり、土抗墓の中から出てきたりするということは死と再生、そこから妊娠・出産、さらには豊穣への祈りを意味しています。

日本文化の深層には縄文文化があると考える哲学者・梅原猛は「埋められた遺骸の上に、死に逆行するかのように毅然と直立する男性性器状の石、そこにはやはり死を越えて生き続けようとする原始人の、強い生命の再生の願いが秘められているのであろうか。たしかに男性性器は、再生への強い意志をあらわしている（日本の美術Ⅰ・縄文の神秘）」と語っています。

石棒に秘められた祈りはそれだけではありません。民俗学者の千

葉徳爾は、石棒は男児の成長儀礼、たとえば成人式のような儀礼に使われたと考えています。少年期から脱して青年の仲間入りする男子が、山に向かって性器を露出し、

新潟県竜峰遺跡出土の石棒

山の神にささげる風習が現代でも残っている地域があるといいます。山の神は女性であり、多産の神なのです。

稲作技術とともに列島にやって来た弥生人たちは、縄文人たちが持っていた神々の体系を、農耕の神と儀礼に置き換え、上塗りしていきました。

しかし、暗い森の中のモノノケへの畏れや、巡り来る季節のように再びよみがえることへの願望は、ユングのいう集合的無意識のように、日本人の心の奥底に横たわっていて、それが時として噴出します。

柳田國男が蒐集した「山姥」の伝承のように、それらは口伝えの伝承として、民衆の中に今も息づいているのです。

金精さま

さて金生遺跡の見学から刺激を受け、石棒のことを書いてきましたが、実はこの石棒を見た瞬間、私は思わず手を打って、深くうなずくほど感激したのです。それは幼い日に抱いた疑問がたちまち氷解したからです。

思い出は急によみがえり、生家近くの神社の境内に場面は移ります。実は私は子供のころから石棒に親しみ、石棒の周りで遊んでいたのです。

私の生家のすぐ近くに一宮浅間神社があります。西暦八六四年、貞観の富士大噴火の後、富士山の祭神である木花咲耶姫命（このはなさくやひめ）を祀るために創建されたという社伝を持つ古い神社です。

甲斐の国一宮浅間神社の拝殿前の石棒

この境内に数基の石棒がありました。子供のころよじ登ったり、裏に隠れたりして遊んだものです。小便をひっかけて神主に怒られたこともあります。

神社の境内だけではありません。町の辻のあちこちに石棒はありました。石棒はほとんどの場所で道祖神と一緒、あるいは道祖神そのものとして祭られていて、小正月にはその前でどんと焼きを行いました。

幼い心にも石棒が男根を象ったものということは分かっていましたが、何のためいつだれがこんなものを祀り、その前でお祭りを始めるようになったのか不思議でしかたがありませんでした。

しかし、金生遺跡の配石遺構の中の石棒を見た瞬間、それが稲妻のように神社の境内の石棒と結び付き、はるか縄文の昔、この盆地に暮らしていた人たちが持っていた風習が、甲府盆地に地下水脈のようにいまも連綿と流れ続けていることに気づかされたのです。

一宮浅間神社はもともと現在地の二キロほど東にあるきれいな三角錐の山（山宮山）のふもとにあり、山宮神社と呼ばれていました。当初は山そのものやそこを水源とする川を祀っていたのでしょう。それが中央権力によって記紀神話の神に置き換えられたのです。

わが家の近くの道ばたにある石棒

このようなことは明治維新にも起こりました。明治政府は天皇中心の国家統制を敷くことによって国の近代化を図ろうとしました。その思想的背景に国家神道を据えたのです。

そのため、民衆の間で広く信仰されていた日本の伝統的な祭神は多くが捨てられ、「王権神話」の神に代替されていきました。

国家神道とは『古事記』、『日本書紀』などの古典を根拠として万世一系の天皇が日本を統治することを前提に、政治的な制度とともに作られた祭祀の制度だと考えられます。その背景には江戸時代の国学者・平田篤胤（一七七六～一八四三）の思想があります。

だから神社に祀られている神を額面通り受け入れることは、歴史を考える上で危険なのです。政府の命令で古い信仰対象を捨て、新しい記紀の神に乗り換えたのかもしれません。しかしその時、古い神は捨てる訳にもゆかず、神社の境内にひっそりと鎮座していると いったことが起こります。

しかし石棒を堂々とご祭神にした神社もあります。金精さまです。金精さまは、金勢、金清、金生、魂生、根性、根精などさまざまな当て字がされていますが、いずれも男根の形をしたご神体が祀られています。

金精さまを祀った神社は全国各地にありますが、特に東日本の東北地方から関東地方にかけての地域に多くみられるようです。そしてこの地域こそ縄文時代の遺跡から石棒が出土する地域とぴったり重なるのです。

金山神社祭礼・性器の形をした餅を作り奉納する

金精といえば栃木県日光の金精峠が有名です。峠には金精神社があります。しかし日光まで出掛けるまでもありません。山梨にもいたるところに金精さまは鎮座して

いるのです。

一例をあげましょう。甲斐市宇津谷にある金山神社です。神社とは名ばかりのみすぼらしいプレハブ小屋に金精さまは鎮座しているのですが、毎年一月二十八日に行われる祭典では、米の粉を練って男女の性器の形をした餅を作り、奉納し、子授け祈願をします。

こういった素朴な信仰こそが国家が介入する前の民衆の信仰です。

山梨県では、明治初期に県令・藤村紫朗の主導する「近代化」の改革が行われました。民俗に対する布達や禁令が発せられ、古くから行われていた多くの祭礼は縮小あるいは消滅しました。しかし俗信、迷信、非近代的といわれようと、民衆の心の奥にしまい込まれた再生と豊穣への願いまで消し去ることはできなかったのです。

甲斐市宇津谷の金山神社祭礼

男根崇拝は今日でも日本の民俗信仰の中に脈々と流れ続けており、縁結び、子孫繁栄、子宝祈願、安産の神として祀られてきました。さらに「生殖」は「生産、稔り」にも通じ、「五穀豊穣の神」としても信仰されています。

道祖神と丸石信仰

石棒に触れたなら、同じ石神である道祖神に言及しない訳にはいきません。道祖神や石仏を熱心に研究している石田哲弥によれば、「祖神塔の分布と造立数は、長野県、群馬県、山梨県、神奈川県、静岡県の五県が抜きんでて多い」といいます。

この五県の中心は山梨県です。山梨県の道祖神の数は二、二二四基という調査がありますが、まさに犬も歩けば道祖神に当たる状態です。道祖神の周りは大抵、草がきれいに刈り取られ、米や果物を供えたり、花がたむけられたりしていて、普段から地域の人々が心のよりどころにしていることがう

かがえます。

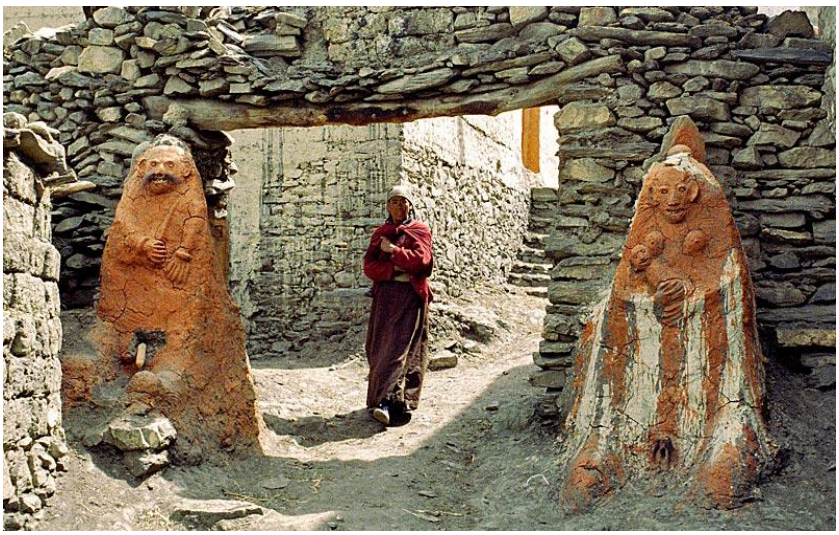
石棒は、道祖神と一緒に祀られていたり、道祖神そのものとして祀られていたりすると書きましたが、民俗学的には男根形の道祖神と金精さまは異なる神と考えられています。

一般的には道祖神の本質は、その名前から「道の神」であるとされています。実際、村や集落の境、分かれ道、峠などに祀られ、旅人など道往く人々を災いから守ってくれると古来より信じられてきました。集落の中に外部から侵入しようとする悪霊や疫病を退けるための「塞の神」でもあります。しかし、山梨県では金精さまと道祖神が習合してしまっているように思われます。またお地蔵さまと同一視されている場合もあります。

道祖神が「塞の神」として祀られている典型的な例を、ヒマラヤ山中で見たことがあります。写真は私が十年ほど前に訪れたネパールのカクベニという村の入口に祀られていた道祖神です。左側の男神には男根が、右側の女神には女陰が赤裸々に表現されています。

２つの川の合流部、三角州の様な場所に位置するカクベニ村

この村はチベット仏教を信仰する人口五百人ほどの小さな村ですが、仏教が入り込む前の民衆信仰がいまも根強く続いていることが



村の入り口にある男女二対の塞の神

分かります。中国を挟んで東と西で全く同じような道祖神信仰が根付いていることも面白いのですが、道祖神として「性器」を祀る相似性に驚きます。

次は地元山梨の例です。写真は山梨市で毎年一月第二日曜日に行われているどんと焼きの時の写真です。稲藁で作られているのはオカリヤと呼ばれる仮小屋です。祭りの様子を書くと長くなりますので、今はオカリヤから突き出している細長い棒のようなものに注目してください。

子供のころはこれが何の意味を持っているのか分かりませんでしたが今となっては明瞭です。カクベニ村の男と同じように男根を突き出しているのです。

山梨を中心とした縄文人たちの信仰は、石棒崇拝から道祖神へと変化をとげながらも一貫した連続体として私たちに受け継がれていることが分かりました。男根型の道祖神やその祭りは、人びとの心の中に働き続けてきた「思考の構造」を表現しているのです。

山梨市のどんと焼きの時のオカリヤ

祭りの在り方は時代によって変化します。だから表面は近世的な装いで表現されていても、その奥にある「構造」あるいは「システム」の由来は、きわめて古いといわざるをえません。

ところでいままで道祖神として祀られている石棒のことについて触れながら、山梨独特の丸石道祖神についてはあえて触れませんでした。本題はここからかもしれません。

実は山梨の道祖神はとても変わっているのです。山梨では道祖神として丸い石を祀ります。丸石道祖神は、山梨に隣接した長野と神奈川の一部地域にあることはありますが、ほぼ山梨独特の文化なのです。

県内の道祖神の数は二、二二四基と書きましたが、この内の三分の一、約七百基が丸石を祀った道祖神なのです。特に盆地の東方面の笛吹市、山梨市、甲州市などに多いようです。私の生家がある笛吹市一宮町では、隣組ごとに一つの道祖神があるといってもいいでしょう。正確に数えたことはありませんが、生家を中心に半径一キロの範囲内に十指に余る丸石道祖神があることは確実です。

山梨市石島公民館横。県下最大の丸石道祖神。

甲州市塩山の丸石道祖神・願いがかなった人は丸石を新たに奉納する

他県の人には丸石道祖神といってもどんなものか想像がつきかねると思いますので、上の写真を見てください。

ただの丸い石です。石島公民館横にあるものは県下最大の丸石道祖神ですが、普通はもっと小ぶりで、人間の頭程度の大きさのものが一般的です。大学の同窓会を山梨で開いた時、関西出身の同窓生のひとりが、道端のあちこちにある丸石に疑問を抱き、「あれは何だ」と指さしたことがあります。

丸い石の道祖神に何の疑問を持っていなかった私は、即座に「あれは道祖神だ、そんなことも分からんのか」と鼻でせせら笑ったのです。するとその同窓生は「山梨は貧しいな～」と感慨を込めて言います。関西では道祖神は石碑や

石像の形態で祀られていることが多いそうです。しかし山梨では貧しさゆえ、まともな道祖神の石碑さえ建てらず、拾ってきた石で代用していると彼は考えたのです。

そう言われると、私も山梨は急流が多く、転がって丸くなった石が手軽に手に入るから、それを道祖神に据えたのかなどと深く考えもしませんでした。しかし、この丸石信仰のルーツは石棒と同じように、縄文時代にあったことが金生遺跡の見学でやっと明らかになりました。

石棒は東北から東日本にかけて広く分布していることから、これと道祖神の関係を論じた研究はいくつもあります。また世界各地に男根崇拝の民族例がありますから、これとの関係で論じたものもあります。

しかしこと丸石に関しては、地域がほぼ甲府盆地に限定されていることもあって、私は丸石と縄文の関係を論じた研究を知りませんでした。もしかしたらこれは日本の考古学、あるいは民俗学の上で新しい発見なのかもしれないと、私は胸をときめかして家路についたのでした。

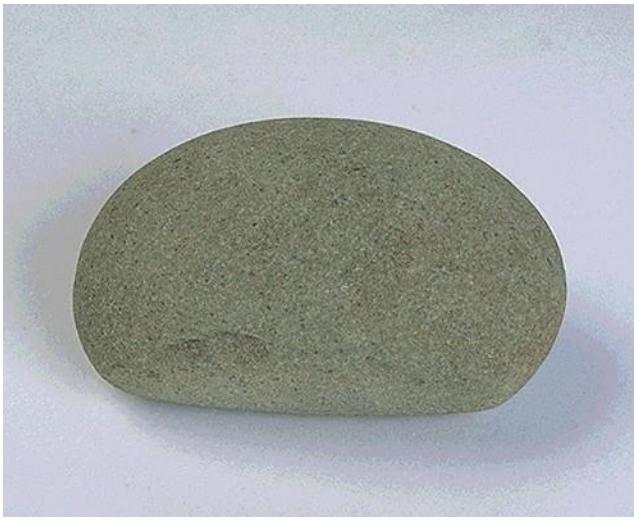
６ページに示した北杜市考古資料館にある配石遺構と石棒の写真をもう一度よく見てください。写真左下隅に丸石が写っているのが分かるでしょう。

これは実物ではなく遺構を再現したジオラマですので、発掘中の写真も載せておきます。ここにも丸石がはっきり写っています。

偶然ではありません。その後、訪れた釈迦堂遺跡博物館でも、丸石が石棺墓と一緒に出て来た例があることが分かりました。山梨の丸石道祖神の起源は、石棒形の道祖神と同じく、縄文時代にそのルーツを持っていたのです。しかし新発見かという希望は早々と諦め

金生遺跡石組み発掘中の写真

ざるを得ませんでした。
　調べてみると、山梨の在野の民俗学者・中沢厚による丸石神の研究が既に発表されています。丸石道祖神の分布の中心部に近い山梨市に住む中沢は、四十年にもわたる地道なフィールドワークの結果を『石にやどるもの―甲斐の石神と石仏（平凡社）』として一九八八年に上梓しました。にわか「縄文研究家」の私がとても太刀打ちできるレベルではありません。
　中沢は八ヶ岳山麓の縄文遺跡から多くの丸石が出土していること、丸石と石棒神との祭祀の共存が見られることから、山梨の丸石道祖神信仰の起源を縄文文化期と想定しています。少し長くなりますがここに引用しておきます。
「彼らの生んだ丸石信仰も遠く及んで大和地方はいうまでもなく西国や東北地方も影響をこうむるようになった。それから長い年代が過ぎ、ついで弥生文化時代とか古墳時代といわれる主として西方から権力集中の変動時代がはじまる。そして結果的に全国的統一の形が出来る。国家の支配権力をにぎったのが大陸文化で武装した九州方面の土着グループか、それとも山陰地方の朝鮮勢力の延長である近江・大和のグループであったか、或はまた朝鮮海峡を押し渡ってきて列島を席巻する騎馬族の一団であったのか、それは詳らかでないがとにかくそんな変動の中でこの島国の事態は一変した。
　中部山岳地方が減退すればその文化的影響も後退せざるを得ず、その後退が丸石信仰が消滅していった原因になる。丸石が広い地域から影を消したが、丸石信仰を自らの生活の中から生み育てた中部山岳地方の人々はそれを捨てがたく思う。真の文化というものにはそういう面があって、借りものでないあかしにも、其の後千年二千年の命脈を保って、よく今日まで残存したのである」
　中沢は、山梨以外にも丸石への信仰が点々と見られることから、丸石信仰は一度は全国に広まったが、その後消滅し、核となる山梨だけに残ったと推測している訳ですが、この考え方には無理があるような気が私にはします。石棒信仰がかなり広い範囲に今でも残っているのに、なぜ丸石信仰だけが山梨に限定されるのかという問いに対する説明がうまくつかないか



三内丸山遺跡出土の磨り石・縄文中期

らです。丸石信仰はもともと「富士眉月弧文化圏」特有の信仰と考えた方がすっきりします。

それでは日本各地に点々とある丸石信仰をどう考えたらいいのでしょう。つぶさに研究した訳ではありませんが私の直感でいえば、丸い石を魂の依り代と見なした思考によるものではないでしょうか。

「掌中の玉」と言い方があるように、私たちはきわめて大切で貴重なモノを「丸いもの」、「玉のようなもの」と考えています。プラトンの時代から球体は完全な形としてとらえられてきました。玉形の石が尊ばれたのは、見た目に立派であるという嗜好と、玉と魂との関係付けがあります。たとえば記紀の天孫降臨の段に登場する玉依姫（たまよりひめ）の「玉」は、霊魂、神のことです。そしてこのような思考は、前史時代に遡るほど古いものとは考えられません。

丸石を女陰とみなし、再生と豊穣への願いを込めた「富士眉月弧文化圏」の信仰とはその起源を別にすると考えたらどうでしょう。

丸石は魂などという「高級なもの」ではなく、あくまで女陰を象徴した性器信仰です。その証拠に、私の地元では、「コンボーメ」と言いながら丸石を棒でつついたり、転がしたりすると子宝に恵まれるという言い伝えがあります。山梨では子供のことをボコ又はコンボコと言います。

「コンボーメ」というのは、「子供産め」です。そして棒でつついたり、転がしたりするのは性交を象徴していると推測されます。さらに丸石道祖神が石棒形の道祖神としばしば同時に祀られること、どんと焼きなどの道祖神の祭りに子供が深くかかわっていることなどもこれを裏付けます。

ここまで書いてきて、石棒と丸石という二つの道祖神が、やがて長野県などに数多く見られる相対道祖神に発展していくのではない

かという予感が湧いてきましたが、にわか縄文研究家としてこれ以上筆を滑らせることはやめておきましょう。

ただ丸石をなぜ女陰と見なしたのかという疑問が残ります。最初はたまご型の丸石もあることから、鳥などのたまごから雛が生まれることが丸石信仰の端緒なのかと想像しました。しかし三内丸山遺跡から出てきた石皿と磨り石の写真を見ていて、丸石の起源はここにあるのではないかと考えるようになりました。

縄文人たちは、木の実などをすりつぶして粉にするため、中央が窪んだ石皿と磨り石をこしらえましたが、同時にこの石皿やすり石は祭器としても扱われるようになっていきます。

三内丸山遺跡・石皿と磨り石

そして女が死ぬと石皿や磨り石を、男が死ぬと男根形石棒を一緒に埋葬したのではないでしょうか。やがて磨り石は、女性器を表現するようになったと考えられます。石棒と丸石が一緒に住居址から出て来た例がありますが、この例からは丸石が石棒と同時に一対の呪具あるいは祭器として意識されていた一つの証拠と見なせるのではないでしょうか。

石皿や磨り石の使用はもちろん「富士眉月弧文化圏」に限られるものではありません。しかし丸石が得られやすい中部山岳地帯に丸石信仰が発展したのでしょう。

では丸石はどこで採集したかという疑問について最後に述べておきます。最初は川で拾ってきたものだろうと私は単純に考えていましたが、いくら河原を探しても丸石道祖神に飾られているような姿が良い丸石は見当たりません。

インターネットで岩石学のページを探し、「球状岩石」などの検索をしましたがヒットしません。

ところが平成七年、奈良県山添

村において、ふるさとホール造成中に、地中から巨大な丸石が出てきたという記事に偶然出くわしました。大きさは直径七メートル。重さは約六〇〇トンです。

この岩の成因として「長い時間を掛けた再固化や風化などの過程で、地層の中に突然、大きな球状岩塊が産出した」という地質学者のコメントが載っていました。

山梨の丸石も川の流れで転がって丸くなった石ではなく、地中で形成されたものではないでしょうか。各地の道祖神の丸石がどこから採集してきたものかまだ記憶している人がいるかもしれません。今後の調査が必要です。

縄文後期・晩期の金生遺跡に導かれ、石棒と丸石、さらには道祖神信仰まで私の歴史への旅は経めぐって来ました。にわか仕立ての勉強で、粗っぽい推測を書き連ねてきましたが、縄文時代は文字のない社会です。

奈良県山添村出土の大きな丸石

研究者たちは遺跡から出土する遺構や遺物から、当時の暮らしぶりを再現しようとしますが、ある程度は推測に頼らざるを得ません。信仰や祭りといった形に残らないものを考えようとすると、その難しさはさらに増します。

アカデミズムの精緻な研究の上に私が積み上げることができる何かがあるとすれば、それは私が「富士眉月弧文化圏」に暮らした縄文人たちと同じ山河を眺め、私の心の底にあの時代から連続して通奏低音のように流れている野生の感性を保持しているからです。

石棒や丸石を精霊の宿るもの、失われてしまった命を再生するエネルギーの源とみなした縄文人の感性は、私が生まれ育った甲府盆地に今も静かに息づいています。その息吹に耳を澄ますことこそが、縄文人たちの信仰を知る近道ではないでしょうか。

星降る中部高地への誘い

金生遺跡訪問から話は石棒、さらに道祖神へと飛び、思い着いたことを長々と書いてきましたが、最後に本稿をお読みいただいて縄文世界や古代の歴史に興味を持った方のために周辺の観光案内もしておきましょう。

「星降る中部高地の縄文世界」には八ヶ岳南麓から西麓にかけて多くの縄文遺跡があります。中でも有名なのが長野県茅野市にある尖石縄文考古館です。ここには縄文住居の復元展示と日本で一番古い

縄文のビーナス

仮面の女神

国宝の土偶が二つあります。一つは「縄文のビーナス」です。平らな頭は髪型でしょうか、それとも帽子を被っているのでしょうか。切れ長のつり上がった目、小さなおちょぼ口がかわいいですね。大きなおなかや豊かな腰は、妊娠している女性を表しているのかもしれません。

もう一つは「仮面の女神」です。逆三角形の板を頭部にくくりつけたかのような顔の表現からこのように呼ばれています。張り出した胴部を太く丸い足で支えて、下腹部には女性器のような文様もあります。すぐ近くの中ッ原縄文公園では、見つかったその場所に、見つかった形のままレプリカが展示されています。

一度に国宝の女神さま二人に会

えるなんて、なんて素晴らしいことでしょう。

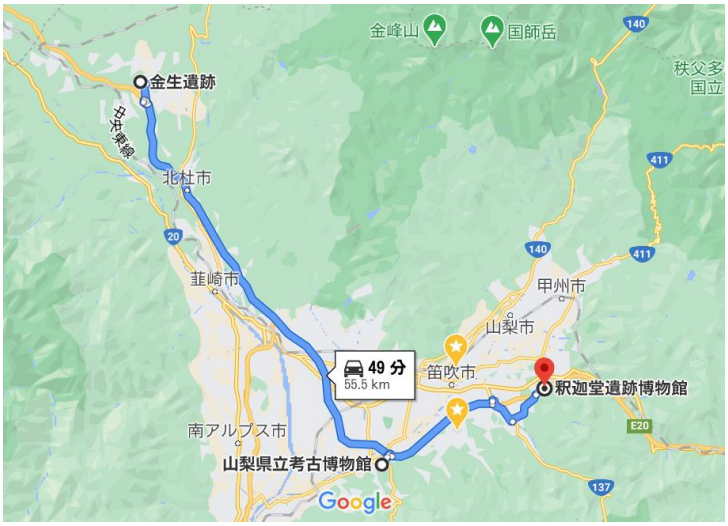
金生遺跡から尖石縄文考古館へ移動する途中にある井戸尻考古館も素晴らしい施設です。博物館の周囲には、井戸尻・曽利・藤内・九兵衛尾根・居平・唐渡宮・向原など、名だたる縄文遺跡が集中し、「井戸尻遺跡群」を形成していますが、これらから出土したものすごい数の石器や土器が展示されています。

井戸尻考古館所蔵・水煙文土器

また井戸尻遺跡は「縄文農耕論」発祥の地としても知られています。八ヶ岳山麓の縄文遺跡の発掘に精力的に取り組んだ藤森栄一は、出土する石器の一部は農作業の一連の過程を担う農具ではないかと考えたのです。

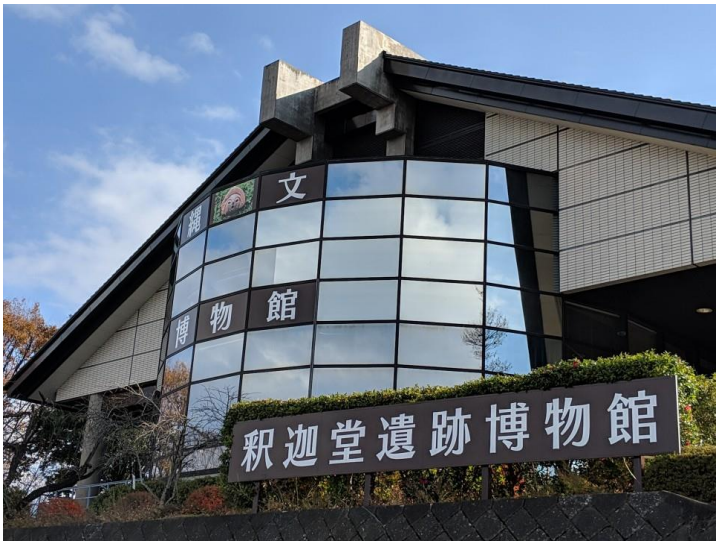
縄文時代は狩猟採集の世界であるという常識を覆す衝撃的な主張でした。畑を耕すために使われたと想像される石鍬やアワやヒエの穂を刈ったと想像される石包丁など、特徴ある展示が見物です。

金生遺跡から南に足を向ければ、甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園の中に山梨県立考古博物館があります。園内には国指定史跡である銚子塚古墳、丸山古墳をはじめ、数多くの遺跡が点在しており、また山梨県内で出土した多くの石器や土器などを見ることができます。



広い園内は森林公園の趣を呈しており、四季折々の景色を楽しめます。とりわけ木々が一斉に色づく紅葉の季節は、歴史散歩にうってつけです。

最後に紹介するのは私の家のすぐ近くの釈迦堂遺跡です。中央高速道路の工事中に見つかった縄文時代中期を中心とした遺跡です。30トンにも及ぶ膨大な石器や土器が出土し、そのうち五千点余が国の重要文化財に指定され、釈迦堂遺跡博物館に収蔵されています。



なかでも一一一六体もの土偶は一遺跡あたりの出土数としては際立っていて、土偶の聖地と呼ばれています。

。この博物館は中央高速道路の釈迦堂パーキングに車を置いたまま、入館できるという珍しい博物館ですので、是非お立ち寄りください。

「星降る中部高地の縄文世界」には、このほかにも様々な遺跡が諏訪湖周辺から甲府盆地にかけて点在しています。霧ケ峰高原の一画にある星糞峠には「星降る」の名前の由来になった黒曜石を産出する鉱山跡があり、数千年前に縄文人たちが黒曜石を掘った後がクレーター状のくぼみとして残っています。

諏訪湖近くにある諏訪大社は縄文遺跡ではありませんが、御柱祭や御頭祭など縄文の雰囲気を色濃く残す神社です。

縄文への旅はこころのふるさとへの旅でもあります。こころの奥に流れる忘れられた遠い記憶を呼び覚まし、この地で暮らした遙か昔の人たちに思いをはせ、自然とともにあった日本の文化の源流を訪ねるタイムスリップの旅はいかがでしょう。

令和二年十一月十日